

小学校 第1学年 国語科 学習指導案

北海道釧路市立中央小学校
教諭 長屋 樹廣

- 単元名** ようすを おもいうかべながら よもう —— 『スイミー』(6時間)
- 単元のねらい** 場面の様子に着目して、登場人物の行動を具体的に想像することができる。
- 本時のねらい** 場面の様子や登場人物の行動など、内容の大体を捉えることができる。(第2、3時)
- 指導時期** 12月

指導者用デジタル教科書(教材)活用の意図・目的

「指導者用デジタル教科書(教材)」を活用することで、学級全体で情報の視覚化・共有化を図ることができるため、より全員参加の授業に近づくものと考え。紙の教科書では、学習者より「〇〇ページの△△行め」という発言があったときに、必ずしもその情報を各自の手もとの教科書で追えていない学習者がいた。しかし、「指導者用デジタル教科書(教材)」でサイドラインを引くことによって、「ここを見てください。」と学習者が示しながら発言することが可能となる。また、本文の内容について想像を広げていくような展開をするときにも、「ここから～のように想像しました。」という発言の価値が高まるものと思われる。したがって、「指導者用デジタル教科書(教材)」を使用することで、本文の叙述をもとに、学習者の考えを形成していくという授業展開をしていくときに、話し合いの論点が焦点化される。さらに、その論点を視覚化・共有化していくことで、全員参加の授業が可能になるなどの効果が期待できる。

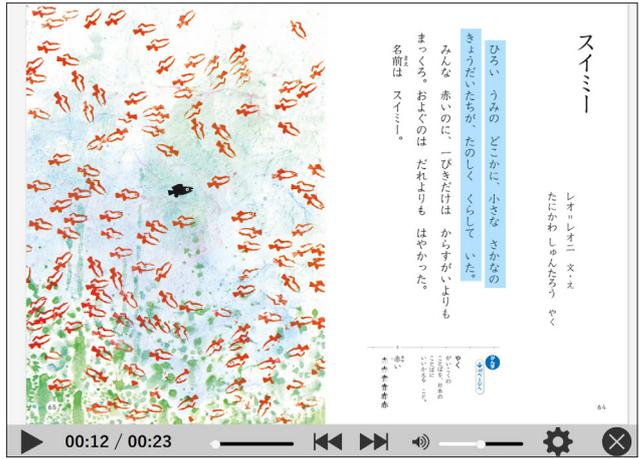
本時(第2、3時)の展開

	活動内容	デジタル教科書・教材の活用
導入	<ul style="list-style-type: none"> 「指導者用デジタル教科書(教材)」の初期画面を開いてコンテンツを起動する。 <p>本時の課題を知る。</p> <ul style="list-style-type: none"> 前時の学び(学習計画など)を振り返り、本時の学び(登場人物やお話の内容)を確認する。 	 <p>■ 指導者用</p> <p>初めのページを開く × おわる</p> <p>目次を開く 本だなへ戻る</p> <p>前回の続きを開く</p> <p>「朗読」などの活用</p> <ul style="list-style-type: none"> 前時を想起させるために、冒頭から最後までを「朗読」を活用して読む。

導入

登場人物を確認する。

- スイミー
- まぐろ
- 小さなさかなのきょうだいたち
- くらげ
- いせえび
- 見たこともないさかなたち
- こんぶやわかめ
- うなぎ
- いそぎんちゃく



● 「教科書紙面」「さし絵」を活用しながら、登場人物を確認する。



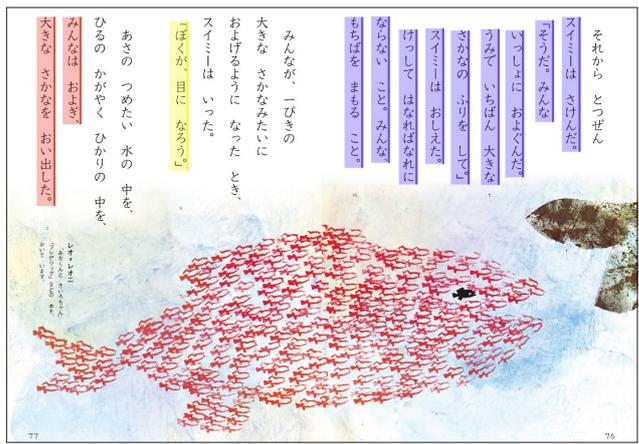
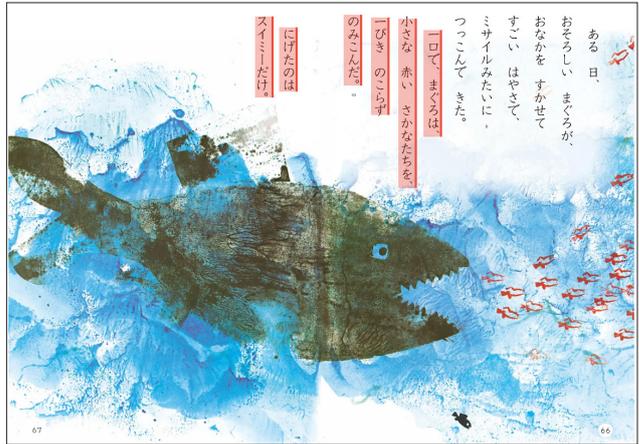
展開

スイミーの様子を表す言葉をめきだしてみよう。

始めと終わりで何が変わっているのかを確認する。

- 個人思考をする。
- ペアやグループで思考する。
- 全体交流する。

● 始めと終わりで、変わっているところに「国語マーカー」でラインを引き、全体で共有する。



	活動内容	デジタル教科書・教材の活用
まとめ	本時を振り返る。 <ul style="list-style-type: none"> ● ノートに本時の振り返りを記入する。 ● 振り返りを共有する。 	<ul style="list-style-type: none"> ● 「さし絵」や「国語マーカー」で引いたラインを確認しながら、振り返りの内容を交流する。

指導者用デジタル教科書(教材)を活用したことで得られた効果

「指導者用デジタル教科書(教材)」を活用することで、本文の叙述と挿絵をつなげて読むことが可能となり、「場面の様子や登場人物の行動など、内容の大体を捉えることができる。」という本時のねらいを達成することにつながる。また、「場面の様子に着目して、登場人物の行動を具体的に想像することができる。」という単元のねらいを達成するための前提を整えることができる。次時以降も、本時の理解をもとに、登場人物の行動を具体的に想像することに寄与するものと思われる。

学習者にとっても、「指導者用デジタル教科書(教材)」により、発言などの共通理解が全員のものとして共有されやすい。例えば、従来の授業では、「○○ページの△△行めの～では…」という説明があったときに、そのページについてくるのが難しい学習者の存在が考えられた。しかし、「指導者用デジタル教科書(教材)」を使用することにより、「画面の○○ページの△△行めの～では…」という説明が可能となり、視覚化・共有化を図ることが容易となる。

また、単元の学習を進めていくうえでも、「前時は、ここに注目した発言があったよね。」「○○さんは、△△の挿絵から～を考えていたよね。」など、単元レベルでのつながりも、より密接に学習を進めていくことが可能になるのではないかと考える。